

第10回東京宝島推進委員会 発言録

日時：令和7年12月18日（木）10時30分～12時00分

場所：東京都庁第一庁舎7階大会議室

1. 開会

【事務局】

定刻となりましたので、ただいまより第10回の東京宝島推進委員会を開会いたします。

私は、事務局を務めます総務局事業調整担当部長の近藤と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

委員の皆様におかれましては、ご多忙の折、ご出席、誠にありがとうございます。

本日は、山田委員長、それから大洞委員、楓委員、藤田委員、小林委員、長谷川委員にご出席をいただいております。

なお、知事、それから総務局長につきましては、公務の都合により、途中からの参加ということでさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日、会議はペーパーレスということで、お手元のタブレット、モニターに資料を表示いたします。同期で動いてまいりますので、よろしくお願ひいたします。

本日の会議の流れでございますが、議題1としまして、東京宝島事業の取組状況等について、それから議題2として、先々月、台風22号・23号の被害と宝島事業における復興に向けた取組ということで事務局からの報告を予定しております。委員の皆様には議題ごとに意見交換をしていただひいて、今後の東京宝島の取組に生かしていければと考えております。

会議の後半では、本日、控えていただひいておりますけれども、東京宝島ブランドサポーターシップ事業に参加していただひいております大学生の皆様から報告会ということで予定をしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、開会に当たりまして、総務局次長の石橋よりご挨拶を申し上げます。

2. 総務局次長挨拶

【石橋総務局次長】

ただいま紹介いただきました総務局次長の石橋でございます。

本日はお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

東京都は、島しょ地域のブランド化を図るために、本委員会でもいただひたご意見、ご助言を踏まえて、これまで様々な取組を進めてまいりました。

足元では、インバウンド客を中心に、国内の観光需要が力強く拡大しているところでございます。島しょ地域におきまして、この機を逃すことなく、その魅力を磨き上げていくために、多岐にわたる分野から忌憚のないご意見を頂戴できればと思ひてございます。

先ほど司会からも紹介がありましたが、本日公務の都合で、総務局長は前半会議の途中で、また知事もブランドサポーターシップの学生の皆さんの発表前には、急ぎ参加させていただく予定でございます。

限られた時間ではございますが、本日も活発なご議論、ご意見を頂戴し、島しょ地域の魅力を向上、持続的な発展につなげていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】

それでは、早速、議事に入っていきたいと思っております。

ここからの進行は山田委員長にお願いをしておりますので、山田委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 議事

【山田委員長】

よろしくお願いいたします。委員長の山田でございます。

本日も委員の皆様、よろしくお願いいたします。

この宝島委員会は、1回目が2017年3月9日開催でございます。もう8年前になりますけれども、3月9日というのは私の誕生日なんですけど、それはどうでもいい話なんですけど、今日は、そういう意味では第1回から見ると、どんどんこの宝島の事業というのは、充実をしてまいりました。大変な広がりを見せているということで、今日もチャレンジプロジェクト、アクセス多様化への取組、そしてサステナブル・アイランド創造事業と盛りだくさんのご報告があらうかと思っております。また、台風22・23号の多大な被害を受けられた八丈島、青ヶ島、その他島々の皆様、本当に大変な復興の今ときを過ごしておられると思っておりますけれども、それについてもご報告が後ほどあるというふうに聞いております。ひとつ今日はよろしくお願いいたします。

それでは、議事次第に従って、本日の議題に入っていきたいと思っております。

(1) 「東京宝島」事業の取組状況等について

【山田委員長】

最初には、「東京宝島」事業の取組状況等についてということで、事務局から説明をお願いしたいと思います。よろしくどうぞ。

【事務局】

それでは、事務局より報告をいたします。資料を進めまして、東京宝島事業のまず全体像を簡単にご説明いたします。

都では、東京島しょ地域の隠れた魅力を再発見し、それから付加価値を高め、島しょ地

域の活性化を図っていくということを目的に、この宝島事業を展開してございます。

現在、大きく四つの枠組みで推進しておりまして、宝島推進委員会の皆様にご助言をいただきながら取組を実施してございます。

まず一つ目が、左隅にございます各島のブランド化でございます。島の付加価値を高めて、ブランド化に向けた自発的、継続的な取組を支援しております。

それから、二つ目、右に行っていただきまして、島しょ産品支援でございます。島しょ産品の高付加価値化を目指しまして、産品事業者への支援等を行うものでございます。後ほど大学生の皆さんに報告をいただくブランドサポーターシップ事業も、こちらの枠組みの中で行っているものでございます。

それから、左下に行っていただきまして、三つ目がプロモーションでございます。東京宝島ブランドの認知拡大に向けて戦略的にPRを実施していくというものでございます。

そして四つ目が右下でございますが、サステナブル・アイランド創造事業でございます。島しょ地域の持続的発展等に向けた町村の公民共創の取組を支援するものでございます。

本日は、この資料の太字で示している事業の状況について個別にご報告をいたします。

それでは、資料、進みまして、まず、昨年度からスタートした東京宝島チャレンジプロジェクトのご報告でございます。

本事業は、複数の島にまたがる新たなサービスの起業や事業化に向けて、意欲ある事業者のチャレンジを支援するものでございます。具体的な支援内容は、3か年で1億を上限とする財政的面で支援に加えまして、関連分野に強みを持つパートナー企業とのマッチング、こうした支援を行ってございます。

令和6年度には、6団体のプロジェクトを採択しまして、今年度、令和7年度は、新たに3団体を採択し、現在9団体のプロジェクトを支援している状況でございます。

続きまして、それぞれの各プロジェクトの状況をご報告いたします。

まず一つ目、令和6年度に採択した6団体から順にご報告ですが、一つ目の団体がてらすワークショップでございます。

テーマは、表頭の太い字で掲げてございますが、「島スポ～島でスポーツをしよう～」というものでございまして、この取組は、閑散期の来島者不足や、スポーツ環境、地域の子供たち等々のスポーツ環境、こうした課題を抱える島しょ地域でスポーツのイベントを開催することで来島者の促進ですとか、島内の子供たちが多様なスポーツに触れる、交流する機会の創出を目指すというものでございます。

主な実績といたしまして、現在までに5件のスポーツイベントを実施してございます。トータル211名の参加がございました。また、大島での新たなスポーツ施設の整備に向けて土地を取得し、ビーチスポーツの関係者を複数巻き込んだ取組を現在進めているという状況でございます。

今後の展開といたしましては、著名人と連携いたしまして、スポーツイベントの規模を拡大していくと。また、来春、開業を予定しているスポーツ施設を拠点に、スポーツ合宿

の誘致、こうしたもので島しょ地域の交流人口の増加、それから、スポーツツーリズム、こうしたものを通じた新たな展開の創出を目指しているという状況でございます。

続きまして、二つ目の団体、こちらが株式会社ネクセライズさんでございます。

取組のテーマは、「再エネで宝島の災害レジリエンス×ゼロエミ化に貢献」という内容でございます。

本取組は、具体的には、太陽光発電普及によるエネルギーの自給力、災害レジリエンスの向上によりまして、島しょ地域のさらなる産業振興、観光振興を目指すというものでございます。

主な実績といたしましては、島内事業者向けに太陽光パネルの設置に関する施工訓練を実施、それから、島内事業者に太陽光パネル設置の実践的なノウハウを共有しているというものでございます。また、島民、それから事業者向けの説明会の実施ですとか、東京都・新島村の合同総合防災訓練、こうしたものに出展をいたしまして、認知度向上に向けたプロモーションにも力を入れているという状況でございます。

今後の展開といたしまして、島内事業者が設置から保守まで一貫して対応できる仕組みを整備する。それから、太陽光発電を島しょ地域で普及させることでゼロエミッションアイランドを目指しているという取組でございます。

続きまして、三つ目の団体でございます。合同会社るとりでございます。

この取組テーマは、「心まで美しく、東京離島リトリート～年間を通じて島の文化と特産品に触れる美・健康ツーリズム～」というものでございます。

本取組では、島の特産品を生かした宿泊と、それから多様な体験を組み合わせ、東京離島ならではのリトリート、日常から離れてのリトリートというものを満喫できる滞在型観光の確立を目指している取組でございます。

主な実績といたしましては、新島で栽培したあめりか芋、それから紅はるか、こうしたものを合計約1.5トン収穫いたしまして、東京駅構内でのイベントに出展・販売を行ったほか、宿泊施設の整備に向けて、コンセプト、それからターゲット顧客像、こうしたものを検討し、企画構想をまとめているという状況でございます。

今後は、来年度、新島で宿泊施設を開業いたしまして、農業体験ができる宿泊施設として、非日常体験を提供するということを目指している取組でございます。

次に行きまして、四つ目の団体、こちらがエアロセンス株式会社でございます。

テーマは「宝島ウイング 物をつなぎ、人をつなぎ、命をつなぐ～国産ドローン物流の社会実装へ～」というテーマで活動してございます。

この取組では、災害時、それから悪天候、島のなかなか厳しい状況もございます。そうしたときに、物流がストップする課題を持つ島しょ地域におきまして、ドローンを活用した円滑な物流網を構築するという、それから、災害時の被害状況の確認、3次元データの活用による観光コンテンツの創出を目指すというものでございます。

主な実績といたしましては、今年6月に新島一式根島、ここの間において、ドローンの

試験飛行会を実施いたしましたほか、11月に、先ほどもございました東京都・新島の合同防災訓練におきまして、連携して開催された自衛隊主催の自衛隊離島統合防災演習というものがございますが、そちらにおきましてドローンによる物資輸送訓練を実施したという実績がございます。

今後の展開といたしましては、新島一式根島間の定期航路開設ということを目指すほか、施設の点検等の日常的なサービスも提供する、こうしたことで災害時に限らない展開を予定しているという状況でございます。

続きまして5点目、五つ目の団体、こちらは八丈島観光レクリエーション研究会でございます。

取組のテーマとしては、「見つけよう、地上の星『光るキノコ』！発光生物ツアー」、こうしたテーマでございます。

この取組では、光るキノコ、夜に、写真がございますけれども、きれいに光るキノコを中心に八丈島の自然環境、それから、観光コンテンツを巡るガイドツアー、それから、展示物の企画、光・キノコをテーマにした八丈島の地域産品の開発を目指すという取組でございます。

主な実績としましては、今年8月、9月、夏場に光るキノコのモニターツアーを実施しまして、約450名の参加がございました。このうち約7割は島外の参加者だというふうに聞いてございます。さらに、計8回実施いたしました有料のバスツアーにも総勢100名の方が参加したという実績があったということでございます。

今後の展開としましては、収益性を踏まえた料金設定、それから顧客価値向上に向けてのツアー内容のブラッシュアップをしていくと。また、産品開発に向けて、新キャラクターのデザインを制作して、来年度から販売をしていきたい、右隅のほうにイメージがございますが、これを進めていくという予定でございます。

次が、六つ目の団体、小笠原グリーン株式会社でございます。

取組テーマは「小笠原カーボンクレジットによる新しい経済価値の創出」でございます。

この取組は、小笠原村の自然環境を生かしたカーボンクレジットを取得いたしまして、新たな経済循環を創出するとともに、森林保全活動で発生した廃材を楽器やグッズ等の製作企業に提供して、アップサイクル商品として展開するということを目指す取組でございます。

主な実績といたしましては、小笠原諸島に樹生する樹木の成長量の調査、それからCO₂吸収量の算定方法等を確立いたしましたほか、本年9月には木材ブランド「BONINIANS」というのがブランドを立ち上げまして、コラボ商品を開発、都内で実施されたイベントで販売をしたというものでございます。

今後の展開として、カーボンクレジット登録対象森林の地権者との交渉、こうしたものを進めていくほか、国内ではまだ未導入ではございますが、生物多様性クレジット制度、こうしたものについても、海外事例調査を行って、検討を進めていくということを考えて

いる状況でございます。

以上が令和6年度採択、ここから令和7年度に採択した3団体についてのご報告でございます。

一つ目の団体が、こちら、株式会社オムニバスでございます。

取組のテーマとしましては、「八丈尾島産Made in Tokyo RHUMよる地域活性」でございます。

この取組では、八丈島を起点としたMade in Tokyo RHUMブランド、こうしたものを核に、農業、それから酒造、観光を連動させて循環型の地域経済モデルを構築するということを目指しております。

具体の取組といたしましては、八丈島の中でサトウキビを原料に、東京産の希少なアグリコールラムを生産するということをまず目指してございます。

八丈で展開した後は、ラム酒の生産を各島に展開していくということを予定している事業でございます。

続きまして、今年度採択、二つ目の団体、こちらが株式会社コクでございます。

テーマは「島内事業者巻き込み型・訪日客向けツアーの造成と販売」というものでございます。

こちらは、訪日外国人旅行者の利便性向上と、島内事業者の主体的な参画を促す仕組みを整備しつつ、島しょ地域における持続可能な観光の新たなモデルを構築して、地域に根差した持続的な経済活動としてインバウンドを定着させることを目指していると、ちょっと難しい表現になりますが、具体的には、株式会社コクが運営いたします多言語乗船予約システム、現在ありますこれを拡張いたしまして、ウェブ上で一括予約、決済が可能なツアー予約システムを構築し、運用するとともに、島内の宿泊、体験、それから交通事業者、こちらと連携して、これまで個別提供されていまして宿泊、体験、乗船、こうしたサービスを一体化したパッケージツアー商品として企画・販売を行っていくということを目指してございます。

当面、大島、それから利島、新島、式根島、神津島、これで先行的に展開いたしまして、その実績を踏まえて、三宅島、御蔵島、八丈島へも展開を図っていきたいということで予定をしております。

最後、三つ目の団体でございます。株式会社SUPERMARKETさんでございます。

取組のテーマは、「TOKYOアボカドから始まる一島を育てる農業と観光の共創プロジェクト」というテーマでございます。

この取組では、島の気候、それから土壌を生かして産品開発、それから若年層の就農、観光と、それから農業の連携不足、こうした課題を抱える島しょ地域におきまして、気象条件により栽培適地が限られるアボカドを軸とした高付加価値な農作物を生産することでブランドを確立すると、こういったことにより、島しょ地域での雇用機会、それから体験機会を創出していくという狙いを持ってございます。

具体的には、国産のアボカドを軸とした高付加価値農作物を生産、「TOKYOベジフル」、こうしたブランドを確立していくというものでございまして、また、ブランドを活用した観光コンテンツ、これも企画・提供していくということでございます。

まず八丈島で展開した後、三宅、御蔵、青ヶ島、こうしたところで展開を予定しているという内容でございます。

今年度は、以上の9団体のうち、令和6年度採択の6団体は来年度が最終年度を迎えるという状況でございます。

支援終了後の自走化、こうしたものが非常に重要でございますし、広域的な展開、これも本事業の鍵となってまいります。引き続き伴走支援を続けていきたいというふうに考えてございます。

チャレンジプロジェクトの報告は以上でございます。

説明が長くなって恐縮ですけれども、続きまして、島しょ地域のアクセス多様化の取組についてご説明をいたします。

本事業は、インバウンド需要の回復という状況を踏まえまして、国内外の接続強化、それから、多様な来島手段への対応を図って、海外の富裕旅行者層の獲得を目指すというものでございまして、令和5年度より取組を進めてまいりました。

令和7年度は「ファムトリップ」と「ビジネスジェット海外見本市への出展」を行ってございます。

まず初め、ファムトリップでございますが、今年の9月5日から9日にかけて、ロサンゼルス国際空港と八丈島空港をビジネスジェットで往復するファムトリップを実施いたしました。昨年度と比較して、招聘人数、それから滞在期間を拡大するとともに、実施時期も昨年は12月でございましたが、観光ハイシーズンの9月に変更をして、過去最大規模の内容ということで実施をいたしました。

また、八丈島空港における出入国手続（CIQ）の検証ですとか、大島へのアイランドホッピング、こうしたものを試行という様々な実証も実施してございます。

招聘したエージェンツからは、島のコンテンツに対しては昨年も同様にですけれども、高い評価、コンテンツとしては非常によい、素晴らしいという評価をいただくことができました。一方で、ラグジュアリーな宿泊施設の必要性など、課題も頂戴したところでございます。また、今年度は八丈島空港で国際線の受入れを実証的に行ったところですが、継続的な受入れということになりますと、空港のハードの整備、それから、手続をする国の機関側の体制確保、こうした様々な課題も判明したというか、分かったというところがございます。

こうした状況も踏まえ、令和8年度につきましては、他地域、この島以外の地域の国際空港と連携したファムトリップ、こうしたものを検討してまいります。

続きまして、ビジネスジェット海外見本市への出展に関する報告でございます。

令和7年10月にアメリカのラスベガスで実施されました「NBAA-BACE」に東京都として初

めて出展いたしまして、ビジネスジェットの目的地としての東京島しょ地域のPRを行ってまいりました。世界最大級の見本市ということもございまして、都のブースには多くの航空関係者に来訪いただきまして、島しょ地域の魅力をお伝えすることができたと考えてございます。

また最終日にはNBAAの会長、副会長とも面会いたしまして、島しょ地域へのビジネスジェット誘致に向けた意見交換も実施してまいりました。

来年度、令和8年度も海外見本市、それから商談会等への出展を継続いたしまして、戦略的なプロモーションを展開するということを検討してございます。

島しょ地域のアクセス多様化に向けた取組の報告は以上でございます。

もう少々お時間をいただきまして、続いて、東京宝島サステナブル・アイランド創造事業についての説明でございます。

この事業は、島の地域を取り巻く課題、それから地理的制約を克服して、にぎわい、活力にあふれた持続可能な地域社会を創出するということを目的に、町村の意欲的な公民共創の取組を支援するというものでございまして、現在、令和4年度に採択された3町村、それから5年度採択の6村を加えた9町村で事業を進めてございます。この事業によりまして、島しょ地域の持続的発展の土台となる基盤整備が前進しているというふうに考えてございます。

一方で、3年間の支援機関という限られた事業期間の中では、どうしても施設整備のほうに注力をして、今後どう活用、展開していくのかというところの取組が、ソフト面での注力はまだ十分でないというところもございました。

昨年度、推進委員会で頂戴しました成果がより確実なものとなるように支援をというようなご指摘ですとか、町村からの要望を踏まえまして、従来の事業が終了した町村を対象に、より高い持続的発展、それから新たな価値創造を目指したサステナブル・アイランド推進支援事業、名称は似ておりますが、こうした事業を今年度から新たに開始してございます。

スライドを進めまして、これまでの創造事業は3年間で補助上限が一町村当たり総額5億円でございます。

今年度開始した推進支援事業、こちらは、創造事業の完了後から3年間、一町村当たり3年間、総額で1億円という支援を行うもので、町村の取組の着実な自走化、こうしたものを目指してございます。

現在、令和4年度に採択された大島町、それから八丈町、この推進支援事業に取り組んでおります。次ページ以降に各町村の事業概要を記載してございます。

まず、大島町でございますが、従来のサステナ創造事業のほうで火山博物館を一新、伊豆大島ミュージアム「ジオノス」と名称を改めまして7月にリニューアルオープンいたしました。

今後は、この推進支援事業を活用して、ジオノスを拠点としたアクティビティ、それか

らガイドツアー等を造成するなど、島全体をジオパークとして展開していくという方向で目指してございます。

それから、下に行きまして八丈町では、観光分野をはじめ、防災・減災分野、それから行政分野でDX化を進めて、取組の一つとして、エコツーリズムの拠点、海・山・暮らし館を4月にオープンいたしました。今後は、さらなる観光客の誘致、満足度向上による産業の活性化、行政運営の高度化、地域防災力の向上によって安定的な地域社会インフラの構築を進めていくということを目指してございますが、後ほど八丈につきましては、台風被害の状況等と併せて詳しくご説明させていただければと思います。

では、資料を進めまして、残る7町村は、今年度末、それから来年度に従来の創造事業を完了する予定の事業でございます。

左上、新島村では、既存の温泉ロッジ、それからガラスアートミュージアムをリニューアルいたしまして、観光拠点としてエリアマネジメントを進めまして、島外から人、企業を呼び込むというものでございます。

右に行きまして、利島村では、住宅不足の解消、それから基幹産業を収益化・循環化するということで新たな移住者、それから担い手の確保を目指すというような取組を進めてございます。

左下へ行きまして、神津島村では、星空保護区を中心としたDX化によりまして、天候、季節に影響されない観光産業を実現するという取組を進めてございます。

右下、三宅村では、噴火の歴史を前面に出したシンボリックな公園を整備いたしまして、島内観光のハブとして地域全体に観光効果を波及させるという事業を目指してございます。

続きまして、今度は御蔵島でございます。島外人材向けの施設整備、それから島内事業者とのマッチングなどによりまして、島外人材と連携したまちづくりを進めてございます。

それから、右に行って青ヶ島村では、地域資源であるひんぎゃ（地熱釜）の高付加価値化で担い手人材を確保して島内のにぎわいと活力を創出していくというものでございます。

それから左下、小笠原村でございますが、既存の小笠原海洋センターをリニューアルいたしまして、まさに小笠原の売りでありますエコツーリズム、この普及啓発の拠点として整備し、エコツーリズムの先進地としての価値を高めるということで取組を進めてございます。

これまでのサステナ創造事業では、島の基盤整備、それから地域資源の活用を進めてまいりました。今年度はより発展的な取組を可能とする新たな支援策も開始いたしまして、各町村の自立的な成長、それから持続的発展をさらに後押ししていくというものでございます。

東京宝島事業の取組状況に関する説明は以上となります。

委員長、よろしく願いいたします。

【山田委員長】

どうもありがとうございます。

情報量が非常に多くて、多分、ここから委員の皆様にご意見、ご感想を伺うということなんですけれども、どこにフォーカスしていったらいいのかということで、皆さんお困りじゃないかと思うんですけども、基本的にチャレンジプロジェクトというのがあって、これは複数の島にまたがる展開をしていくと。一方で、サステナブル・アイランド創造事業というのは、それぞれ、これは前からやっている事業をずっと引き継いでいますけれども、各それぞれの島のよさを引き出していくという、そういう違いがあります。アクセス多様化というのは、その中を結んでいくという交通の話ですけれども、どの点でも結構ですけども気になった点、あるいは、それに対してこうしたほうがいいんじゃないか、もう進んでいる事業ではあるんですけども、ご意見をいただければなというふうに思います。

申し訳ないんですけども、私のほうからまず指名をさせていただいて、お一人、2分ぐらいでコメントを頂戴できればと思います。

まず、大洞委員、いかがでしょうか。

【大洞委員】

本当に情報量がいっぱいあって、今、頭がいっぱいなところなんですけど、サステナブル・アイランドは、これまでもやってきて、特に昨年度、チャレンジプロジェクトがいっぱい出てきたなという感じなんですけど、これ、一般論ですけども、内容そのものは、みんなすごくいいよねと。当然、ある意味、大義というか、目的そのものは非常に、批判しにくいんじゃないんですけども、当然こういうことがあってしかるべきだよねということだと思っと思うんですね。

だけど問題は、多分、実際にこれをやったときに、島の状況も踏まえたときにいろんな課題が出てくるはずで、その理想をいかに実現するかに向けての課題が何で、それをどうしていくのかということの議論がどっかであってもしもいいのかなというふうに思いました。

全体としては以上です。個別の話に入ると幾つかありますけれども、きりがないので、そういう意見です。

【山田委員長】

ありがとうございます。

基本的に理想的な事業なんだけれども、それをちゃんと実現していくプロセスをしっかり見なきゃいけないよということだったと思います。ありがとうございました。

楓委員、いかがですか。

【楓委員】

ご説明、ありがとうございました。

私からはチャレンジプロジェクトと、それからアクセスの件でご提案も含めてお話しし

たいと思います。

チャレンジプロジェクトの内容を伺いまして、特に新島のリトリート、それからドローンの活用、八丈島の光るキノコといったところなんですけど、現在、私どもの学生もお世話になっておりますブランドサポーターシップは、主に産品のお手伝いということでございますけれども、こういった事業の取組、事業の進展と、それから事業者の方の受入れ体制もございますけれども、今後、こういったところに学生の新しいアイデアといいますか、彼らなりのアイデアをうまく一緒にできるような機会、そういったこともお考えいただけるといいのではないかなということと。

2点目は、ビジネスジェットでございます。これはもう間違いなく需要があつて、今、富裕層だけにビジネスジェットの焦点が当たっていますけど、これから企業研修といった分野でもビジネスジェットがどんどん活用されていきますので、そういった意味では、さっきのアイランドホッピングの中で、アイランドシャトルをどう効率的に活用して、アイランドシャトルの収益性というのは、やや課題があるというふうに私は認識しておりますけれども、特に八丈島から青ヶ島は、もうぜひ海外の方にも見ていただきたいところですから、その往復ができるようなヘリコプター、アイランドシャトルの運用を包括的に考えていただいて、それが提案できれば、海外の旅行会社に提案できれば、かなり可能性が出てくるのではないかなというふうに思っております。

以上でございます。

【山田委員長】

どうもありがとうございます。今、チャレンジのほうでは、学生さんのアイデアも取り入れてということですが、またこの後、ブランドサポーターシップ事業のご報告もありますので、何かそういう意味では実現に近づけていくための学生さんの力というのも期待したいところですね。ありがとうございました。

あとは、ビジネスジェット、企業研修のお話もいただきました。多様な展開を頭に置いて、念頭に置いて考えていかなければいけないと思います。

それでは、今度は小林委員、一言お願いいたします。

【小林委員】

ありがとうございます。本当に情報量が多くて、どこにフォーカスすべきか悩んでしまうところではあるんですけども、今、すばらしい事業の芽みたいなものが出ている段階で、これを継続的に実施していくために担い手の話があったと思います。

移住、定住までは難しくても、二地域居住みたいな話が、今結構、至るところで出ていると思うんですけども、100%コミットは無理でも、1年間のうちに30%、この地域のために貢献したいだとか、そういう人はたくさんいると思いますので、これから始まるふるさと住民登録制度ですとか、また企業側の努力も必要だなと思っております、ボランテ

リア休暇を積極的に使って、このような取組に参加するような機会があると、都民、皆さんも、都内での二地域居住とかもとても面白いかなとは考えておりました、そういう取組を官民連携でやっていけるといいのではないかなと思いました。

【山田委員長】

ありがとうございます。そうですね。地域のために貢献したい、島々の暮らしを向上させるために、自分も力を貸したいという、そういう人たちがたくさんいらっしゃると思うので、100%は無理でも、3割でも2割でも、そういう協力をしていただけるような体制、呼びかけみたいなことは必要だというお話かと思いました。ありがとうございます。

それでは、長谷川委員、お願いいたします。

【長谷川委員】

ありがとうございました。たくさんの情報と進捗で、大変勉強になるものばかりでした。全体を通して既に進んでいるプロジェクトばかりだと思いますので、一つ、もっとこうしたらいいんじゃないかなと思った点としましては、2017年にスタートしたプロジェクトだと伺っています。サステナビリティという言葉が、ちょっと前だと最新の言葉で、SDGsというのがはやりというものだったと思うんですけども、そこから今少し鈍化しているような感覚があります。この言葉というものが日本人にとってマーケティング的な視点でも、物すごく、Z世代、SDGsとか、片仮名用語、まさに小池都知事もお得意の、国民に、都民に知らせる何かそういったキーワードをもう少しまく使うのも東京都っぽいんじゃないかなと思いました。

そのうちの一つの提案として、例えばですけども、資料の中にもあった、例えばアボカドが99%輸入に頼っている、国の安全保障の視点から見ても危険だよ、昨今の国際情勢を見ても、ちょっと頼り過ぎるのはあれだよという点で、リジェネラティブという言葉、もちろん皆さん、ご存じだと思うんですけども、この資料にある言葉を最新のアップデートされたものにするだけで、より届く層が変わってくるんじゃないかなというのは、一つ今すぐにできることなのかなというふうに思いました。

あともう一点、富裕層だったりとか、あと、先ほど楓委員がおっしゃっていたような企業に頼る、研修に頼るといふところもものすごく魅力的だなと思います。今はまさに新卒で、もう既に社会人になられている世代の子たちは、コロナを経験している、学生時代にコロナを経験している、細かく言うと学生の文化祭だったりとか、卒業式、入学式、そういったアクティビティを経験していない子たちが今社会に出始めているので、何かその反応とか、相性もすごくいいんじゃないかなと思いました。

あと、海外の富裕層にかなり注目されているなと思いましたけども、日本にも多くのウルトラ富裕層がいると思います。記事を拝見していると、観光業も、いわゆる富裕層が多くいると言われる港区で食事をするよりも、富山にわざわざ2時間かけてミシュランを食

べに行ったりとか、海外に頼るだけでなく、国内のそういった富裕層も取り入れられたら、なおいんじゃないかなと思いました。

駆け足ですみません。すばらしいプレゼンでした。ありがとうございました。

【山田委員長】

どうもありがとうございました。95%輸入に頼っているアボカドを日本でということなんですが、さっきのキーワード、ごめんなさい、もう一回言っていただけますか。

【長谷川委員】

リジェネラティブというんですけれども、ほぼやっていることはもう同じなんですね。サステナビリティと同じような概念ではあるんですけれども、再生させるという意味で、例えば劣化した土壌とか、微生物とか、まさに資料にあった内容だとは思いますが、少しずつ減少していったものを回復させながら、経済も、植物、ファッションだったりとか、いろんなところに使われてきている言葉かなと思うんですけれども、今、主には、農業で使われることが多いかなと思うんですが。

【山田委員長】

リジェネラティブですか。

【長谷川委員】

はい。リジェネラティブですね。

【山田委員長】

分かりました。ありがとうございます。

【長谷川委員】

はい、ぜひ。

【山田委員長】

そして、海外の富裕層だけでなく、国内にもお金持ちの方がいっぱいいらっしゃるから、そういう人もどんどん呼び込みましょうと。それから、企業研修等も活性化させていきましょう。確かに、コロナで我慢していたものを解き放ちたいという、そういう気持ちを持っている若い方はたくさんいらっしゃると思うんですけれども、富裕層の方々もそうでしょうけれども、そういう意味では、宝島はそれに対して非常に最適な場を提供できるのではないかなというようなお話だったと思います。

では最後に、藤田委員、お願いいたします。

【藤田委員】

手短に三つ、提案を駆け足でお話ししたいと思います。

一つ目のチャレプロでございますけども、今回、八丈島で実際にチャレンジプロジェクトの事業者様が被災されたというところがございます。ぜひ東京都として、このプロジェクト自体がそもそも島内と島外の組合せということですので、島外事業者及び東京都の皆様方でぜひサポート、支援をしていただきたいなというふうなお願いでございます。

その他の島についても、東京宝島、なかなか被災される可能性、災害が発生する可能性が高うございますので、ぜひ今後のプロジェクトを東京都さんが引っ張っていく上で、レジリエンス、また片仮名ですが、2人で片仮名を使ってもあれなんですけども、そういう災害があったときの再生力、そういったところ、災害への防備といったところは、新たに力を入れていただいて、またエアロセンスなんかも活用していただければなというふうに思います。

二つ目のアクセス多様化につきましては、少しお手伝いさせていただいているので、付加情報で申し上げますと、今回、アメリカ、それからアジア、東南アジアの富裕層の方がいらっしゃったところで、何が評価されたかということ、八丈島のシュノーケリング、あと、島民交流等はあるんですけども、私も1回、八丈島へ行きましたけれども、なかなか富裕層の方がシュノーケリングで楽しむのかなと、リジェネラティブにも関係するところですけど、というような新しい視点といったところをご提供いただいたのと、そのときに一緒に行った島内の方々が歴史的なストーリーを語るというところ、ここが非常に好評であったというふうにファムのツアーでは聞いております。

魅力は確認ができましたので、ぜひ来年は、富裕層の旅行の見本市でありますILTM (International Luxury Travel Market) 等、そういう商品、旅行商品の見本市のところにはぜひ出展していただいて、アピールしていただくのがよろしいのかなというふうに思います。

すみません、3番目、最後で、全体に関してです。これまでこの三つの施策というところで、各島のやる気を引き出すということ、ブランド化をつくっていくところですね。それで事業を育成し、人材も育成してきたかというふうに、それが芽が出てきたかなというふうに思っております。

ですので、先ほど2017からスタートしたというところがありましたけども、2027、令和9年あたりからは、この出口戦略、チャレプロの方々の出口戦略ということで、ぜひ今度もう一回、東京宝島ということの塊にしてマーケティングプロモーションしていくというところも、少し新機軸、これらの今までの事業者様たち、それのお客様ですね。顧客の人たち、海外も含めて、そういった方々と併せて、もう一回、東京宝島を塊として打ち出すタイミングかなというふうに思っておりますので、それをご提案させていただいて最後にしたいと思います。ありがとうございました。

【山田委員長】

ありがとうございます。2番目におっしゃられた富裕層の件なんかは、受入れ側の体制とか、宿泊施設とか、そういったところの充実も重要なというふうに思いました。

あとは、最後に総括的なところでおっしゃっていただいたんですけども、言ってみれば、これだけの事業を展開してきたわけで、その実績もちゃんとしっかりと打ち出しをしながら、ある意味でリブランディングじゃないですけども、より一層の発信力を高めながら、次のフェーズに行くということかなというふうに伺っておりました。ありがとうございます。

ということで、非常に多くの情報を今日お聞きになられて、しっかりとご意見をいただきましたということで、これはぜひ事務方の皆さんも受け止めていただいて、次につなげていただきたいなと思います。

そうしましたら、まだ総務局長はお入りにならないということでございますが、もうこの次のテーマに……。

いらっしゃる、どうぞ。ちょうどいいタイミングで。ありがとうございます。

(総務局長入室)

【山田委員長】

ちょうど今、佐藤総務局長が来られましたので、では、本当に着座されてすぐで申し訳ないんですが、一言、今までいろいろと事業のご報告等を受けて、それに対しての委員の皆さんのご感想をいただいたと、ご意見をいただいたというところでございます。よろしくどうぞ。

【佐藤総務局長】

一言だけ、公務の都合で遅くなりまして、大変失礼いたしました。

本日は、年末のお忙しい中、委員会にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

ご案内のことかと思えますけど、先般、台風22号・23号、立て続けに来まして、八丈島と青ヶ島では被害が生じました。特に八丈島の被害は、テレビなどでもかなり報道されて、先生方もご存じのことかと思えます。

ちょうど被害発生から2か月ちょっとたちました。今、私ども、行政部の職員と、あと、水道局の職員ですとか、全局の職員で応援に出ていまして、あと、都庁の八丈支庁という総務局の出先機関がありまして、その職員と応急復旧に当たってまいりましたけれども、今2か月が過ぎまして、応急復旧の段階から復興の段階に差しかかっているところであります。

復興という場合に、元の八丈島、青ヶ島に戻すのか、戻す中で一步ステップアップを図るのかというところが非常に重要なところだと認識しています。その意味では、今日の議論もそういう点にも、私ども勉強させていただいて、いろいろ政策に生かしてまいりたいと思います。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

【山田委員長】

ありがとうございました。総務局長から一言いただきましたけれども、復旧から復興へということで、そこで戻すのか、ステップアップか、そこを今これからも、この次ちょうど復興に向けての取組についてというご報告もいただきますので、また委員の皆さんにもご意見をいただければなというふうに思います。

(2) 令和7年台風第22号及び第23号の被害と宝島事業における復興に向けた取組について

【山田委員長】

それでは、続いての議題、今申し上げたとおり、台風22号・23号の被害と宝島事業における復興に向けた取組についてということで、事務局からのご説明をお願いしたいと思います。よろしくどうぞ。

【事務局】

それでは、ご報告いたします。資料を進めていただけますか。

本年10月の22号・23号により、八丈島、それから青ヶ島村を中心に被害が発生いたしました。幸い、人的な被害は確認されておりませんが、建物、それから道路の被害のほか、停電、通信の不通、それから断水といった島民の皆様の生活に大きな影響を及ぼすものとなっております。加えて、それから農林水産業の関係では、判明しているものだけで17億を超える被害が生じたという状況でございます。

この間、東京都は、町村、それから関係機関と連携を取りまして、スピード感を持って応急復旧に取り組んでまいっております。

特に八丈島の島民の皆様の生活の影響が非常に大きかった水道の復旧につきましては、予定より早く断水を解消することができたという状況もございます。今後、八丈町、青ヶ島村の本格的な復興に向けまして、被災された方々の早期の生活再建、これはもちろんのこと、農業、観光業といった事業者の事業継続に向けた支援、それからインフラの本格復旧、防災対策の強化、こうした様々な観点での取組が必要となっております。

東京都では、これらの復興に向けた取組を町村と連携して推進することで、先ほど局長からも申し上げましたように、さらに魅力、活気のあふれる島へと進化させるということが重要だと考えてございます。

こうした状況も踏まえまして、島のブランド化に取り組む宝島事業におきまして、復興に向けて地元と連携した取組が必要だというふうに考えてございます。

八丈島では、エコツーリズムの拠点として町が整備した八丈島の海・山・暮らし館が今回の台風で被災をいたしました。本年4月にオープンしたばかりで、かなり人気もあった施設でございますが、建物内に土砂が流入したという状況で、即時の復旧はなかなか現状では困難という状況となっております。

そのほか、八丈島、青ヶ島、この特産品である島酒ですとか、こういった物をはじめとする製品の事業者、それから八丈島でプロジェクトを進めているチャレンジプロジェクトの採択事業者などからも、事業進捗に若干影響が出ているというふうな状況は聞いてございます。

こうした状況を踏まえて、島の復興に向けまして、宝島事業としても、この地元町村、それから、事業者さんの取組をしっかりと支援して、産業の復興、振興をしっかりと後押ししていくということが重要であると考えてございます。

そのために町村からの要望ですとか、関係事業者の方からの声をきめ細かく聞き取って、こうした地元のニーズをしっかりと把握するということが第一でございます。こうしたものを第一に対応を進めてございます。

全体としては、まずは住民の方の生活再建、こうしたものが最優先ではございますけれども、将来を見据えて、元の状態以上、さらにプラスアルファの付加価値をつけて、島の魅力向上につながるような取組を戦略的に進めていきたいと考えてございます。

個別具体の取組につきましては、来年度予算の編成過程で検討・調整を進めておりますので、本日はこうした方向性で都も取り組んでいくということのご説明までとさせていただきますけれども、先生方からも引き続きご助言等々を賜ればと考えてございます。

説明は以上でございます。よろしくお願いたします。

【山田委員長】

近藤さん、ありがとうございました。

ここから皆さんのご意見といたしますか、ご感想をまた伺いたいなというふうに思っておりますけれども、実際にチャレンジプロジェクトにしても、サステナブル・アイランド創造事業にしても、結構、八丈島で実施、実行されるようなものがあって、実施中と。さっきのアボカドもそうですかね。どういう被害が出ているのか非常に心配されるのですが、さあ皆さん、どなたからでも結構でございますけれども、またお一人、2分ほどご意見をいただければと思います。挙手してください。

では、こちらのほうから、まず藤田委員から。

【藤田委員】

八丈島の今回の件に限らずなんですけれども、地域観光の世界、地域の地方の世界でいい

ますと、こういった災害というのは地震があったり、火災があったり、いろいろ起きてお
ります。

その後、例えば皆さん、どうされているのかということかというと、クラウドファンディ
ングで募集をするんですね。ただ、クラウドファンディングで、じゃあ行ったこともない
ところ、食べたこともない農園、加工食品を作られている方々というところでお金が集ま
るかということ、それはなかなか被災して大変だというのは皆さん知ってはいますけども、
なかなか見つけられない、アクションにつながっていないということで、なかなか苦戦し
ているというふうに聞いています。

そのときに思い出す事例が、コロナの時期ですけども、スイスのツェルマットのDMO、
ここは何をしたかといいますと、それまでツェルマットのエリア、スイスは全国から、全
世界から来ますので、その方々の名簿というのが各宿泊施設にありまして、それをみんな
集めて出してくれと、みんなでお手紙を書いたそうです。あのエリアは、コロナ、あんま
り関係ないということで、ぜひ来てほしいと、安全ですということで、それで復旧、復興、
その後の復興につなげたというふうに聞いています。

東京都さんがやるべきこととしては、個別事業者の支援といったところは、なかなかそ
れは難しいことだと思っていますので、先ほどの話にもつながりますが、ぜひ東京宝島と
してのファンマーケティング、ファンベースマーケティング、これは長谷川さんがお得意
なところですけども、ファンのデータベースをつくって、それで、こういった島のどこか
で災害が起きるといったときに対して、ぜひ復活したいので支援してほしいというよう
なことです。東京宝島と関係のある方に関してデータベースをつくっていく。これは、公
共財になりますので、都もしくはそういった関連の方々でつくれることかな、やれるこ
とかなというふうに思っております。

そういう意味では、ぜひ東京宝島として、個別の島、個別の事業者さんのやる気という
のもできてきていますので、それをぐるっとまとめた形で塊として、そういった形で災害
に備えるというのは一つの手かなというふうに思って、事例を紹介させていただきました。

【山田委員長】

ありがとうございます。

それじゃ長谷川さんに、今お名前も挙がりましたけれども、ファンベースマーケティング。

【長谷川委員】

ファンベースマーケティング、そうですね。私自身、能登半島で地震があったときに、
一般社団法人、災害支援法人に私が所属しておりますので、そのときの経験を踏まえてお
話しできればと思います。

能登でも現在進行形でまだ水道が通っていない地域もあつたりだったり、まだ町全体の

戻すのか、新しくするのか、冒頭にあった議論がまだ多分されている最中だと思います。

ここは、本当に、災害がきっかけで皮肉にも議論されるのが何とも言えないと思うんですが、私がボランティアをしている、ボランティアとか災害支援をしていく中で、能登という地域に初めて足を踏み入れて、日本酒が大好きですので、もちろん支援中は何も、何というんでしょう、そういったことはなかったんですが、知るきっかけが生まれました。

そのエリアの方も、能登では難しいかもしれないけど、ぜひ金沢でお金を落としていてねというふうにお言葉をいただいたりとか、何が言いたいか言うと、ボランティア状況が今、今回の報告で見えてなかったの、何とも言えないんですけども、例えば都のほうの支援でもう少しボランティア、直後のボランティアと長期的なボランティアの2種類が災害時にはあると思っておりまして、この長期的なボランティアという点で、例えば学生だったりとか、まさに大企業さんだったりとかのサポート、スタッフとかのサポートも経て、この東京宝島を知ってもらい、これが、災害がきっかけというのが、もしかするとひんしゅくだったりとか、いろんな声があると思うんですけども、少なくとも私は、個人的にはそういったきっかけで能登の魅力を知れたので、ファンになるきっかけはつくこともできるんじゃないかなというのは思いました。

ただ、人的な被害がないという点と、水道も予定より早く改善されたという点と、さすがだなと思いましたので、ここはもう少し高く評価して、報道チームなどとうまく連携し、もっと都民、23区というか、東京都全体の区と連携して、もっと報道メディアに知ってもらわなきゃいけない事態なんじゃないかなというのが一つですね。

【山田委員長】

ありがとうございます。実際に、自分が支援をする、災害の復旧に貢献するという点で、より一層、その町や島を知ってファンになっていくと。すごい絆ですよ。これは災い転じてというふうになればいいと思いますけども、ぜひお考えをいただきたいのと、都のほうにもお願いをしておきたいと思います。

楓さん、いかがですか。

【楓委員】

2か月がたって、あの頃は本当にマスコミにも随分出たんですけども、すっかり今、新しい災害とか、いろいろありますので、忘れてしまっていたなというのが正直なところなんです。

これから完全に復興されて、お客様を以前と同じように受入れが可能になってくるタイミング、そこをぜひ、どしどし行くという島ではないんですけども、八丈島、皆さんお客様を迎えられますというようなキャンペーンは、ぜひ都のバックアップで進めていきたいと思います。

以上です。

【山田委員長】

ありがとうございます。いつ頃なんですかね、復旧、今はまだ途上ではあるけれども、いつ頃から迎え入れができるかと。

【佐藤総務局長】

昨日、都議会が閉じて、補正予算が成立して、様々な誘客対策ということをやっています。目玉としては、今、たまたまホテルが閉じていたり、雇用する人が給料をお支払いできなくなっちゃうので、帰っちゃう人がいるんですね。そうすると、もうなかなか戻ってこれられないので、雇用を何とか維持するような手だてをやっている、すぐに始めないと日々の生活のお金ということになりますので、そういうことは昨日の予算の中で取ったので、まさしく観光が本格的に復旧する、オンシーズンになるのが春、夏ですから、それに向けてしっかり頑張ってもらいたいと思います。

【山田委員長】

はい。ということで、青ヶ島なんかは、宿泊の施設自体が足りませんから、そういうところは工事業者の方とかでいっぱいになっているんだろうなと想像はつきますけれども、何か支援をしながら、またそこに町を知るきっかけづくりということで行っていただけるような機会が早く生まれれば良いなと思いますね。

小林さん、いかがですか。

【小林委員】

ありがとうございます。

以前、藤田委員と、八丈島と青ヶ島を訪れたんですけれども、今回の災害ではなかなか支援も、非常に課題とか困難が続いているだろうなというのは想像しております。

ファンベスマーケティングみたいなお話があったんですけれども、先ほどの話でもした、ここは二地域居住とかにも結構つながってくるのかなと思ひまして、こういう緊急時は現場も非常に混乱したりとか、大変な状況でありますので、初めての方が来られてもなかなかボランティアとしてすぐに稼働できなかつたりすると思います。なので、ふだんから宝島の方々と交流があったりとか、常に宝島を頻りに訪れている方というのが、こういうときにこそ生きてくると思うので、ふだんからの交流人口づくりというのは非常に重要だなと感じました。

また、本日のプレゼンテーションの中でもあったんですけれども、ドローンの物流支援なんかは、非常によい取組だなと、このためにというわけではないんですけれども、島では、例えば食品だけとかではなくて、お薬だとか、体のために必要な物を欲している方もいらっしゃると思うので、こういう物流だとか、交通の事業というのを、チャレンジプロ

ジェクトはこういうときにも生きてくるんだなと感じました。

以上です。

【山田委員長】

ありがとうございました。ドローン、なかなかたくさん物をまだ積めないみたいなんですけれども、ぜひ期待したいですね。

では、最後に、大洞さん、お願いします。

【大洞委員】

手短に。宝島推進の委員会で、この復興の話というのは、もうそのとおりだと思うので、特に八丈島のサステナブル・アイランドの取組は、まさにある意味、島の強靱化そのもの話なので、これの枠組みの中で推し進めるといえるのは当然のことだと思うので、ぜひよろしく願いをします。

以上です。

【山田委員長】

どうもありがとうございます。

いろいろとご意見をいただきましたけれども、どれも参考になるようなご意見、特にファンベースの話になっていくとは、僕も思っていなかったんですけども、着目点としてはありますよね。こういうときに支える、支え合うという、そういう精神、非常に大事なかなというふうに思っております。

この後、間もなく知事が入ってこられるということなんですけど、あと3分ほどお時間がございますけれども、いかがですかね。今日の前半のところも含めて、いろんなご意見をいただけたんですけれども、事業がちゃんと推進をしていっていると。そして形を生み出しているというような状況がちゃんと見える化してくるといいかなというふうに思いますので、たくさん事業があるけれども、その一つ一つが丁寧に伝わるような形の発信というのは、また、この島のファンを作っていくきっかけになるんじゃないかなと、そんな気もいたしましたので、よろしく願いしたいと思います。

どうぞ、お願いいたします、佐藤さん。

【佐藤総務局長】

ファンデータベースの考えは非常に参考になります。八丈島はシイタケ栽培をやられている方など、すごくそういう形でコアなファンの方がいらっしゃって、そういうところは非常に参考になるなと思いました。ぜひ、政策に生かしていきたいなというふうに思います。

あと、今回の場合、物資を届けるのに、天気が悪くて船がなかなか着かなかったんです。

八丈島はジェット機が飛んでいて自衛隊の輸送ができたということがあったので、荷物を運ぶこともできたんですけども、小さな島、例えば利島ですとか、三宅ぐらいでも、ジェット機がなかなか着きませんので、ああいう大きな物を輸送するという、例えば車とか、重機ですとか、なかなか大変なので、そういうところもしっかりやっていかなきゃいけないかなというふうに思っています。

あとは、今回苦しかったのは通信の途絶で、それは避難者の方も一緒に、今はスマホが必須なので、水道、電気、ガスというのが一般的にライフラインと言われますけど、今は通信ができないというのはすごくストレスになると思うので、そこをしっかりとやっていかなきゃいけないのかなと。

今回も青ヶ島は、架空線のところが駄目だったんですね。地下のところは全然大丈夫なんで、最初、青ヶ島の通信が途絶したときに海で切れたと思ったんですけど、海のところは大丈夫で、外に上がったところ、電柱のところが駄目だったんですね。

たまたま東京都は、いわゆるスターリンクみたいなものを配置していたので比較的よかったんですけど、仕事も通信がしっかりしていれば大抵何とかなるというところがあるので、そこを感じました。

取り留めのない話だったんですけど。

【山田委員長】

ありがとうございました。確かに、もう水道、電気、ガスよりも通信という時代ですので、そこが途絶というのは本当に怖いことだと思います。

そろそろお着きになられましたかな。まだもうちょっとかな。

ということで、ぜひ、ただ本当にこういう台風が立て続けに同じルートで来るなんてことはめったと、というか、今後はもう絶対はないと思っていますので、何か島が怖いとか、災害にまた行っても遭うのかもしれないとか、そういう考え方に皆様にならないようにしたいなというふうに思いますね。

極めて平和な、ふだんは穏やかな島ですから、そういう心配は本当はないというところですね。

さあ、いろいろと今日は最初のほうからたどると、チャレンジプロジェクトは、2年にもわたって実行しているわけですが、それからサステナブル・アイランド創造事業はもう本当に当初からやっていたものがずっと今も引き継がれてきているという展開でございまして、粛々と前に進めるだけでなく、さらにこれを皆さんに知らせる、さらに新しいアイデアをそこにつぎ込むというようなことでアップデートするというよりも、進化させていくというようなことがこれから問われていくのかなというふうに思った次第です。

この後、ブランドサポーターシップ参加大学生の皆さんの報告会もございますので、それもまた楽しみにしたいと思いますが、今、知事が入ってこられました。

【山田委員長】

知事、ありがとうございます。お忙しいのに、お時間をいただきます。

今いろいろと災害の対策の話、それからプロジェクトの進捗状況、今後の方針等々も伺い、委員の皆さんのご意見も頂戴したところであります。

着座されてすぐで申し訳ありませんけれども、知事から一言、お願いをしたいと思いません。よろしくどうぞ。

(3) 知事挨拶

【小池知事】

皆様、おはようございます。本日は10回目になります東京宝島推進委員会でお集まりいただいております。東京には島がたくさんあります。一つ一つが宝島です。そして、中には宝物がいっぱいあります。それを掘り起こして、磨きをかけて、そして広く伝えていくということで、皆さんのご尽力に感謝を申し上げたいと思います。

観光という観点から言いますと、実は、先日、11月ですけれども、東京は、サウジアラビアが行っている、観光省が行っている「TOURISE AWARDS」という2025、こちらで最優秀賞を獲得いたしました。BEST OVERALL DESTINATION、いろんなカテゴリーがあるんですけども、その中でも最優秀だったということで、大変誉れに思っております。

そして、昨日発表されました世界の都市総合力ランキングで、ニューヨークを抜いて東京が2位になったと。あともう一つというところがございますけれども、観光地の充実度、そして、ナイトライフに高い評価も得られたということがございます。

もう一つ、これでもかという感じですけども、「コンデナスト・トラベラー」という非常に、先生、ご存じのように、その分野でとても評価の高い雑誌がございますけれども、その中で世界で最も魅力的な大都市ランキングで、こちらはもう既に2年連続で1位ということがございます。

まだまだ東京でなすべきことがあると思っております。都市部と異なる魅力を持つ島々の魅力、個性をもっと生かして、また、人や投資を呼び込んでいくということが全体の東京としての、またそれはすなわち日本としての魅力を高めることだと思っております。

一方で、今年の台風は、22号・23号と、八丈島を中心に大変荒らしてくれました。ひどい状況でもあったわけですが、八丈島、それから青ヶ島の復興へ向けて東京宝島でどう取組を進めていくべきかということでご意見を頂戴したところでございます。

考えているのは、ただ元に戻すだけではなくて、これを機会に島の魅力をさらに高めていくという視点ではないかと思っております。東京が誇る宝島でございます。もっともっと磨いてまぶしく輝くようにしてまいりたいと思います。

皆様方からのいろんなご意見をいただいて、施策を練り上げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。ありがとうございます。

【山田委員長】

知事、ありがとうございました。

(4) ブランドサポーターシップ大学生報告会

【山田委員長】

それでは、これからブランドサポーターシップ事業の大学生の皆さんの報告会に移りたいと思います。

事務局の近藤部長に進行をお願いいたしたいと思います。よろしくどうぞ。

【事務局】

それでは、報告会に当たりまして、この事業に関して簡単にご説明をいたします。

本事業は、島しょ地域とZ世代をはじめとする若い世代、このつながりを目的に都内の大学生を島しょ地域に実習生として派遣するものでございます。

大学生のほうから商品パッケージですとか、情報発信の方法、こうしたものについて若者目線で提案を行って、事業者とともに実現を目指すというものでございます。

派遣先は、大島、利島、八丈島、この三つの事業者で実習も行ってございます。

今回、参加大学は、令和5年度から協力いただいております楓委員の國學院大学、それから、矢ヶ崎委員の東京女子大学に加えまして、多摩美術大学、東京都立大学、この4校から計20名の方にご参加いただきました。この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。

本日、参加者の中から16名の学生の皆様にお越しいただいております。

それでは、事業に参加された学生の皆様から大島、利島、八丈、この三つのグループ順に内容、今後の展開等についてご報告をいただければと思います。

まず、大島のSHIMA STAYにて実習を行った東京女子大学の中島優和さんからご報告をお願いいたします。

【東京女子大学 中嶋さん】

ブランドサポーターシップ、大島チームの発表を始めさせていただきます。東京女子大学の中嶋です。よろしくお願いいたします。

まず、チームと受入れ特産品事業者についてです。

大島チームは、國學院大学2名、多摩美術大学1名、東京女子大学3名、東京都立大学1名の計7名が参加しております。

受け入れてくださった特産品事業者はSHIMA STAYで、特産品は明日葉と大島牛乳です。

今回のプロジェクトのテーマは、「サイクリングで大島を巡りながら明日葉や大島牛乳の魅力を知ってもらおう若者向けコンテンツの企画」です。

島での実習は8月25日から8月30日まで行われました。実習では、SHIMA STAYの神田がコーディネートをしてくださり、三原山の登山や、大島内の散策による大島の火山がもたら

す自然の体感や、明日葉農家さんへの訪問、大島牛乳工場の見学、自転車でのサイクリングコースの体験などを行いました。

島の食材を味わえる飲食店で地元事業者の方との交流会では、大島への思いや、若者に知ってもらうための課題などを伺うことができました。

実習期間中には、今回の実習で知ったことや感じたことを整理したり、今後の提案の方向性の議論の時間も設け、事前学習では分からなかった大島の魅力や実態を体験することができ、短い時間ながらも充実した実習となりました。

実習を終え、学生からは、このような感想が出てきました。

自然や文化、島民の皆さんとの交流で大島の魅力を体験でき、実際に現地を訪れることができてよかった。実際に大島を巡ってみたことで、自転車や徒歩では見つけにくいスポットが多くあることを知った。

一方で、実習や島の方からお話を伺う中で、今回のプロジェクトのテーマに対しての課題も見えてきました。特に観光で来ても、特産品の魅力を意識しないまま滞在する観光客が多い。明日葉や大島牛乳は大島ならではの、島外の若者はそもそも認知していない。自転車移動のコースは多いが、案内が十分ではなく、島全体の魅力として可視化されていないといった課題を感じました。

今回の実習で得た経験やご意見などを基に、魅力的な大島の特産品を自転車で巡りながら若者に知ってもらうきっかけとなるコンテンツを提案していきたいと考えております。

提案の方向性としては、「手に取って、持ち歩き、話したくなる大島」をコンセプトとして考えています。特産品の魅力を直接説明するのではなく、生活に自然に入り込むアイテムを通じて、行動そのものをメディア化することを意図しています。

ターゲットは、椿祭りに訪れる若年層に設定しました。滞在期間が短いため、興味喚起のきっかけが効果的に刺さるのではないかと考え、また、口コミやSNS発信が活発であることから設定をしています。

提案内容は、持ち歩けるPRツールを作成し、ターゲットとなる椿祭りに訪れる若年層に配布をし、大島の魅力、興味を喚起させることを考えています。PRツールはトートバッグ、パンフレットを検討しており、若者にふだん使いで持ち歩ける物を提案していきたいと思っています。

トートバッグ、パンフレットには、自転車で巡ることができる特産品に関わるスポットをデザインして、手に取って持ち歩き、大島の話をしたくなるコンテンツとして提案をしていきます。

ご清聴、ありがとうございました。

【事務局】

中嶋さん、ご報告ありがとうございました。

それでは、続きまして利島の農業協同組合にて実習を行いました國學院大学の山野井か

りんさんと、それから、東京都立大の山根凜風さんからご報告をお願いいたします。よろしく申し上げます。

【國學院大學 山野井さん】

これから利島チームの発表を始めます。発表者の國學院大学4年の山野井かりんと。

【東京都立大学 山根さん】

東京都立大学3年の山根凜風です。よろしくをお願いいたします。

私たち、利島チームは、國學院大学2名、東京都立大学2名、多摩美術大学2名の計6名で構成されています。

本プロジェクトでは、「ツバキ材を活用した、利島らしいお土産・消費者向け製品の企画」をテーマに取り組みました。

利島には現在、およそ20万本のツバキの木があり、年間で約300本が除伐されています。しかし、有効に活用できているのは全体の約3割にとどまっており、外注によるくし加工を中心に販売が行われている一方で、多くのツバキ材は、圃場で廃棄されているのが現状です。

そこで私たちは、くし以外の新たな加工品や、原料としての活用方法を検討し、資源を無駄にすることなく、利島らしい産品を生み出すことを目指しました。

今回の実習では、JA利島の高橋さんにご協力をいただき、ツバキの木材加工場所をはじめ、ツバキ山の散策、ツバキ油の製造所、苗木を育てるグリーンハウスなど、様々な現場を訪問しました。現場での見学や対話を通して、ツバキが利島の産業や暮らしと深く結びついていることを学ぶ貴重な経験となりました。

実習期間中は、利島のツバキ産業に関わる方々をはじめ、多くの島民の皆様と交流させていただきました。事前に情報として知っていた利島の姿と、実際に現地を訪れて感じた印象には、いい意味での違いがあり、島民の方々との対話を通して、利島での暮らしや、島ならではの魅力をより具体的に知ることができました。

また、地域が抱える課題や、今後の利島の展望についてもお話を伺い、学生として現地で学ぶことの意義や、机上では得られない多くの気づきを得られた実習となりました。

【國學院大學 山野井さん】

実習を通して島の方々と直接関わる中で、私たちは利島への愛着がより深まったと感じております。実際に島で過ごし、利島の暮らしや考え方に触れることで、島の雰囲気や人の温かさを肌で実感することができました。

インタビューでは、等身大の利島の方々のお話を伺いました。また、現地の子供たちとの交流も印象に残っております。さらに、実習でお世話になった民宿の方が、最終日に港までお見送りしに来てくださったことも、島の方々が私たちの提案に対して率直なフィー

ドバックをくださったことも、議論が白熱した場面もありました。

こうした一つ一つの出来事を通して、私たちは利島の方々の温かさや、人の距離の近さを強く実感しました。そして、利島はこんなにも魅力的な島なんだということを実際に訪れて初めて実感いたしました。

一方で、その魅力は、島外ではまだ十分に知られていないのではないかと感じました。だからこそ、今回の実習で私たちが感じた、利島ってこんなにすてきな島なんだという気持ちをもっと多くの人に伝えたいと感じました。そのための一つの方法として、利島の魅力を知ってもらうきっかけとなるプロダクトをつくりたいと考えております。

実習を踏まえ、私たちは二つのグループに分かれて提案を検討しました。

まず、私の所属するチームは、利島の認知度向上や人手不足といった課題に着目し、水の希少性や水配り伝説といった利島ならではのストーリーを生かした提案を行いました。

水に濡らすことで模様が浮かび上がる木製プロダクトを作成し、日常生活の中で利島を感じてもらうきっかけをつくることを目指します。あわせて、作成過程を体験できるワークショップ形式での展開も想定しております。

もう一方のチームは、若い世代にとって、ツバキが必ずしも身近な存在ではないという点に課題を感じ、利島の神代椿油とセットで使える「かつさ」を提案いたしました。ヘアケアだけでなく、フェイスクケアやボディケアにも使える体験を通して、利島の多様な魅力を伝えることを目指し、現在はポップアップイベントでの展開も想定しております。

私たちは、今後、利島の魅力を体験してもらえるプロダクトを通して利島に関心を持つ人が一人でも増えていくことを目指していきたいと考えております。

また、そのプロダクトがツバキ材を有効活用する新たな手段の一つになればうれしいです。

以上で利島チームの発表を終わります。ご清聴いただき、ありがとうございました。

【事務局】

山野井さん、山根さん、ご報告、ありがとうございました。

続きまして、八丈島の「エンケルとハレ」にて実習を行った東京女子大の宮永佳奈さんからご報告をお願いいたします。

【東京女子大学 宮永さん】

それでは、これからブランドサポーターシップ八丈島チームの発表を始めます。東京女子大学の宮永です。よろしく願いいたします。

まずはチームと受入れ特産品事業者についてです。

私たち八丈島チームは、國學院大学1名、東京都立大学2名、多摩美術大学1名、東京女子大学3名の計7名です。

今回、私たちは八丈島でフレッシュチーズを製造する「エンケルとハレ」の魚谷さんの

下でチーズの製造実習を行い、チーズ作りの工程に加え、島での暮らしや働く人々の思い、八丈島の未来について学びました。

私たちのテーマは、「チーズを通して八丈島の魅力を発信し、将来の観光資源化と関係人口の拡大につなげる」ことです。

実習期間は8月26日から31日の6日間で、実習先のエンケルとハレをはじめ、島内の複数の事業者を訪問しました。現地へ実際に足を運ぶことで、私たちが訪問前に抱いていたイメージを上回るほどの魅力に気づき、八丈島の新たな可能性を実感いたしました。

実習を通して、特に印象に残ったことは大きく四つあります。

一つ目は、島の人々の温かさです。短い時間の中でも、出会った方々の真っすぐな話し方や温かい接し方が印象的でした。

二つ目は、特産品に込められた思いです。島の風土や歴史を背景に、真摯にもものづくりをされていることを知り、その背景まで届けたいと思いました。

三つ目は、厳しい状況でも前に進もうとする事業者の方々の姿勢です。八丈島をよりよくしたいという思いを持ち、前向きに取り組む姿が心に残りました。

四つ目は、島民同士の支え合いの関係性です。互いに助け合い、励まし合いながらものづくりをされている姿を見て、温かいコミュニティが島の大きな魅力になっていることを感じました。

一方で、実習を通して島が抱える課題も見えてきました。八丈島には数多くの魅力がありますが、その魅力が島外だけでなく、島内にも十分に伝わっておらず、ブランド力や認知度が高まっていないということです。エンケルとハレのチーズのように、島外で評価されていても、島内ではその魅力が十分に認識されていないように思います。島の方々がその価値を改めて認識することができれば、地域全体の活気にもつながるのではないかと考えています。

そこで、エンケルとハレのチーズを入りに、八丈島の魅力を声で届けるポッドキャスト配信を提案しました。音声を通して生産者の思いや、島の空気感といった八丈島ならではの魅力を最も自然な形で届けられると考えています。

メインターゲットは、首都圏在住の20代から50代です。自然や食文化への関心が高く、実際の来訪につながりやすい層と想定しています。

私たちが目指すゴールとしては、知る、共感する、行きたくなる、関わり続けるという循環を生み出すことです。音声メディアが八丈島の未来を後押しする一歩となることを信じてこの施策を提案しました。

現在は島外の卸先である飲食店を中心に取材交渉を進めております。

ご清聴、ありがとうございました。

【事務局】

宮永さん、ご報告、ありがとうございました。

それでは、山田委員長より総評をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

【山田委員長】

どうも各参加された大学生の皆さん、ありがとうございます。素晴らしいご報告だったと思います。

とりわけ、このポイントというのは、こういう若い方々が、若い時期に島に行って島の方々とはよく話をし、いろいろなものづくりとか、サービスづくりに取り組むということだと思ふんですね。

実は、私も若い頃に式根島というところに行きまして、その後、すぐに行ったわけではないんですが、やっぱりファンになっているんですね。そうすると、私の心の中の式根島、新島、また行きたいということになる。多分、こちらにいらっしゃる皆さんが、家族を持ってお子さんができて、どっかへ行こうといったときに、この思い出とともにもう一度島を訪れていただく。

それから、あと、産品はエバンジェリストということをよく申しますけれども、発信力になります。その中で、ツバキ油というのは、どうしても年配の方が使う物というイメージがあるんですが、そんなことはないんですね。素晴らしい力があるので、美肌効果もありますし、こういう若い方々が、ツバキ油、いいよという発信をしてくださるといふのもすてきなというふうに思いました。

大変によい成果が生まれたなど、そして、これからも生み続けるんだなというふうに思いました。ありがとうございます。

【事務局】

山田委員長、ありがとうございました。

それでは、知事より一言よろしくお願ひいたします。

【小池知事】

皆さん、ご苦労さまでした。それぞれ島に実際に足を運んでみて、発見をしたり、また、そこからどうすれば、この島がもっと知られるようになるか、いろいろ考えてくださったこと、それ自体がとても素晴らしいことだと思いますし、ぜひそれで成果を上げていきたい、このように思っています。

そして、新鮮な視点と行動力、アイデアが東京の宝島を盛り上げていくための大きな原動力になると改めて思っております。

そして、皆さんも島のことは、普通考える機会もないかもしれませんが、この機会に、これからも、山田委員長がずっとうん十年もファンであり続けるように、これからも島への愛着を心に刻みながら、またもう一度、改めて訪れていただく、また、友達を引っ張っ

ていく、そしてポッドキャストの案もありました。より多くの方々に知っていただくということ、共に進めていきたいと思っております。

それから、委員の皆様方にも、東京宝島の取組について、ずっとこれまでも熱心にご助言、ご議論をいただいております。島の持つ魅力がさらに磨きがかけて、そして持続的に発展をする、今回、八丈島は大変厳しかったんですけども、むしろ、ピンチをチャンスに変えていければと思っております。

皆様方の引き続きのお力添えを心からお願い申し上げまして、一言、私からの感想とさせていただきます。また、委員の皆様方も本当にありがとうございます。

【事務局】

知事、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして第10回宝島推進委員会を終了いたします。

(記念撮影)

以上